

平成23年度留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット）採択プログラム
「東アジア・ユーラシア地域を結んだ国際日本研究交流プログラム」

東アジアとユーラシアを結んだ 国際日本研究の挑戦

筑波大学人文社会科学部研究科長 川那部 保明

Yasuaki Kawanabe

筑波大学人文社会系准教授 小野 正樹

Masaki Ono

1) コンセプト

「日本の研究は実証的である。中国の研究は総合的である。西洋の研究は理論的である」。中国の研究者から聞いた各地域の研究特色のフレーズである。日本の研究は細分化されている。西洋的な理論のぶつかり合いでは、NHK テレビで好評を博した『ハーバード白熱教室』を見ていると、私のまわりの研究スタイルとは異なりを感じることもある。それは1つの社会問題を、異なる理論から徹底的に追究しようとするアプローチである。アリストテレス的に考える視点と、カント式に考えた場合の異なりを、教授は紹介する。視聴者は両者の異なりを理解することはできる。一方、日本の人文研究は、文献を含めるが、データに基づき、ケーススタディとして解決を図る。

東アジア・ユーラシアの各地域・各教育機関では「日本研究」への関わり方が当然異なる。日本での日本研究、中国での日本研究、ユーラシア地域での日本研究を比較すると、それぞれの特徴がある。日本での視点やアプローチでは見えないものを、各地域の大学院生の視点から見て、視野の拡大と交流を図ることが、本プログラムの根底にある。

様々な要素が絡み合い、たおやかで、繊細さに注目してきた人文の研究内容、反対に、社会科学分野では日本にある矛盾に注目し、構造やシステムの分析・解決方法を提案してきた。こうした2つのアプローチを包括するものとして、筑波大学人文社会科学部研究科では「インターファカルティ教育・研究イニシアティブプログラム」として、“異分野融合プログラム”という Certification Program があり、その延長線にあるのが、本プログラムである。

今回のプログラムでは、中国の北京大学・浙江大学、韓国の高麗大学、エストニアのタリン大学、カザフスタンのカザフ国立大学、ウズベキスタンのタシケント国立東洋学大学、キルギスのキルギス国立大学、ポーランドのヤゲウォ大学、ウクライナのキエフ国立大学から35名のSS大学院生と、本学から北京、ソウル、タリン、タシケント、サマルカンド、アルマティ、モスクワに計25名のSV学生が短期留学を行った¹（ソウルとタシケント、サマルカンドについては2012年3月までに行う予定である）。

¹ 日本学生支援機構留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット）において、「SS」は学生の受入れ、「SV」は学生の派遣を意味する。

2) プログラム内容

本プログラムは、大学院博士前期課程・後期課程の学生を対象としたもので、SS学生には筑波大学人文社会系の教員が、各自の研究レビューを行う「人文科学特講Ⅰ・Ⅱ」を始め、集中講義での「人文科学特講Ⅲ」「社会科学特講Ⅰ」、そして、「ウズベキスタン・日本学生フォーラム」と「第1回東アジアとユーラシアを結ぶ国際日本研究フォーラム」での活動を評価する「プロジェクト演習Ⅱ」を授業内容とした。また、留学生センターでの日本語プログラムの受講を可能としている。さらに、学内にSS学生専用の研究室を設けて、研究議論のスペース確保や、インターネットなどの便宜を図った。

SV学生には、「プロジェクト演習Ⅱ」として、「中国人民大学・北京大学・筑波大学合同フォーラム」、「タリン大学・筑波大学合同フォーラム」、「高麗大学・筑波大学合同フォーラム」、「文明のクロスロード-ことば・文化・社会の様相-日本学学際シンポジウム」、「第1回東アジアとユーラシアを結ぶ国際日本研究フォーラム」でのいずれかの研究発表、及び、大会運営を課した。「プロジェクト演習Ⅱ」がSS学生、SV学生共通になっているのは、いずれのフォーラムも協働学習を行ったためである。

3) プログラム生の選定

SS学生の募集は、協定大学からプログラム採択後に速やかに行い、計画通り東アジアから10名、ユーラシア地域から25名の計35名を招聘した。専門はいずれも日本研究で、共通言語は日本語とした。日本語・日本文化という全般的なテーマから、文学、言語、社会と広範囲に及んだが、博士後期課程の学生はいずれも博士論文の具体的なテーマが記されており、筑波大学での指導教員と渡日前から連絡をとっている学生も見られた。

4) 単位付与と修了証書

本プログラムは学際的なことから、特定の専攻ではなく、人文社会科学研究科長を統括として、研究科内の日本文学、日本語学、比較文学、ロシア語学、中国語学、政治学、社会学など、異なる専門教員が受入れを支えた。SV学生には、研究科内にある「国際交渉力強化プログラム」、「インターファカルティ教育・研究イニシアティブプログラム」内で開講されている演習・講義科目の単位付与を行った。また、SS学生には、研究科長名による修了証書の授与と受講授業と単位数の概要を提供した。

5) 教育内容 (SS学生)

「人文科学特講Ⅰ・Ⅱ」としては、言語・文学・社会を講義テーマとして、オムニバス形式の授業を設定した。言語では、日本語学をはじめとして、参加者地域のスラブ語学、中国語学の講義内容、文学では、日本の中世から、近代文学という通時的な内容から、比較文学のアプローチ、また、社会問題を扱った移民問題、政治、メディアをテーマとして、参加者の研究テーマに沿った内容を扱った。集中講義の「人文科学特講Ⅲ」では、「文化としてのことばを探る～配慮を要する場面におけることばの働き

に注目し、社会文化的背景を取り入れながら日本語の特徴を探求するワークショップ～」、「社会科学特講 I」では、「日本・アジアにおける人の国際移動の研究、その方法と実践～現状と課題を踏まえて～」で、趣旨は同様である。いずれも新規開講である。

6) 教育内容 (SV 学生)

筑波大学人文社会科学部では、協定大学との合同フォーラムをここ数年行っており、そうしたイベントをより充実する方略として、本プログラムを活用した。具体的に行った海外でのフォーラムは、「第9回中国人民大学・北京大学・筑波大学合同フォーラム」、「第1回タリン大学・筑波大学合同フォーラム」、「第3回高麗大学・筑波大学合同フォーラム」、「第9回文明のクロスロード-ことば・文化・社会の様相-日本学学際シンポジウム」の4つである。また、国内でのフォーラムは2つ行い、10月に「ウズベキスタン・日本学生フォーラム」(主催 筑波大学 ウズベキスタン大使館)を企画し、プログラム生以外にもウズベキスタン共和国の10大学の学長、日本で学ぶウズベキスタン人留学生50名、また、ウズベキスタンに興味・関心のある日本人大学院生を招聘し、大学交流を図るイベントを行った。このイベントに合わせて、ウズベキスタンの協定大学から3名の学生を招聘し、研究交流を行った。フォーラム運営に当たり、本学学生による実行委員会を立ち上げ、メーリングリストやホームページの開設、イベントの映画祭、講演会、研究発表会などを行った。

また、「第1回東アジアとユーラシアを結ぶ国際日本研究フォーラム」を1月21日に行うが、内容は講演以外にもSS学生とSV学生によるポスター発表形式での研究発表を予定している。

7) プログラム紹介①

「ウズベキスタン・日本学生学術フォーラム2011」では、2日間にわたり筑波大学で講演会、研究発表、文化紹介などのイベントを行った。SS・SVの学生が実行委員としてグループを組織して、発表プログラムの確定、予稿集の作成、当日の司会進行など、企画・運営を協働して行った。

発表件数は25件で、4つの分科会に分かれて行った。

分科会① 言語・文学・日本語教育

(1) 入山 美保

相互理解の観点からの日本語教育—北方領土・択捉島を例に—

(2) Muradova Ella

現在ウズベキスタンにおける日本語教育の力

「ウズベキスタン・日本学生学術フォーラム」のウズベク語と日本語のポスター

リキュラムをめぐる問題

—タシケント国立東洋学大学を例として—

(3) Khalmirzaeva Saida

ウズベキスタンと日本の語り物に関する比較研究

—口頭的構成法と語り物の教習方法—

(4) Halnazarov Maamoorjon

ウズベク語の二人称代名詞 *sen* と *siz* の使い分けについて

(5) Aminova Nodira

夏目漱石の『こころ』のウズベク語翻訳における困難点

(6) Gulyamov Izzatilla

「平家物語」に見られる軍事用語の考察

分科会② 歴史・社会

(1) 中嶋 哲平

バクーの知識人ラスールザーデと全ロシア・ムスリム大会（1917）

—ミツリエトへの認識を中心に—

(2) 植田 暁

帝政ロシア支配期フェルガナ社会のGIS分析

(3) Rasulov Muhammadjon

日本及びウズベキスタン倒産法制度における否認権の分析

—否認権行使の相手方、その時的範囲、主観的要件を中心に—

(4) Ryota Saito

Sustainable Water Management in Uzbekistan

—Local authority's impact and international aid—

(5) Chagay Alena

ソ連崩壊後のコリヨサラムの社会移動と社会的地位

—ウズベキスタンのコリヨサラムに焦点を当てて—

分科会③ 法・政治

(1) Elmurodov Eldorjon

The Role of Civil Society Institutions in the Democratization and Modernization of State Governance

(2) Karaev Laziz

Education system in the Republic of Uzbekistan

(3) Ataeva Gulrano

Challenges for Building a Civil Society in the Developing World:

The Case of the Kyrgyz Republic

(4) Tsoy Tatyana

Overview of Online Social Networks and Their Effect on Social Capital

(5) Nematov Jurabek

Judicial review as guarantee of entrepreneurs' rights in Uzbekistan:
comparative study of administrative litigation

(6) Sapyazova Gyuzel

Legal Base and Provisions of Public Associations in Uzbekistan:

Differences between registration of public associations as legal entities and
associations

(7) Хашимов Валижон

Теоретический аспект понятия «наиболее тесной связи» в международном
частном праве

分科会④ 経済・資源

(1) Karabaev Daniyar

Threat to Glaciers of Central Asia: A Case of Tajikistan

(2) Karshibaev Jasur

The Exchange Rate Regime Choice Problem

(3) Нарбаев Шухрат

Окитайских инвестициях в страны Центральной Азии

(4) Musurmanov Ilyas

How Bilateral Investment Treaties of Uzbekistan Protect Foreign Investors

(5) Turaev Jasurbek

Teaching of MBA in Waseda University

(6) Sultankhodjayeva Guzal

Immigration Policy of Japan: Case study of student immigration policy

(7) Nosirov Akmal

The influence of globalization in Uzbekistan

であった。詳細はWEB <http://tsukubauiforum.wordpress.com/> で公開している。

8) プログラム紹介②

「第9回中国人民大学・北京大学・筑波大学合同フォーラム」(2011年11月実施)では、学生発表が20件行われた。12月に来学予定の北京大学のSS学生と本大学のSVの学生実行委員が中心となって、グループを組織し、プログラムの確定、予稿集の作成、当日の司会進行を協働して行った。発表件数は3つのセッションに分かれている。



北京大学での「第9回中国人民大学・北京大学・筑波大学合同フォーラム」の全体集合写真

第1セッション

(1) 新井優子

日本語非母語話者が用いる質問表現—非母語話者同士及び母語話者との会話の比較から

(2) 山下悠貴乃

中国語母語日本語学習者の依頼における配慮表現

(3) 李友敏

日本語教科書の【本文】に関する一考察—北京大学編集の基礎段階用教科書を対象に

(4) 楊文江

ヨウダの「知覚」用法と日本語エヴィデンシャルの意味地図仮説

(5) 郭琴

『敦煌』の成立研究—『敦煌物語』との関連性を中心に

(6) 馬耀

『江都督納言願文集』における神仙表現の特徴

第2セッション

(1) 劉劍

否定から見る「動詞+テイル」

(2) 王金博

接続詞の共起現象から見る文章展開パターン—接続詞「そこで」との共起を手掛かりに

(3) 郭曉麗

谷崎潤一郎の『細雪』における雪子像—身体と女性の関係から見る

(4) 王暁

「てくれる」構文の中国語訳に関する一考察

(5) 孫斐

キャッチコピーの「N1にN2を」と「N1にN2をV」形式について

(6) 何巧玲

日本アニメにおける「三国演義」の再演義

第3セッション

(1) 金玉英

日本語の勧誘表現に関する一考察

(2) 曾維平

中国語と日本語の間接受身の対照研究

(3) 劉愛美

日本語の談話における省略表現の運用条件に関する考察—配慮表現の立場から

(4) 王雅芳

戦略的CSRに関する一考察

(5) 劉蘇蔓

助詞「ね」の本質的機能についての一考察—情報管理態度の観点から

(6) 彭苗苗

<呐喊>に用いられた日本語からの借用語に関する研究

(7) 李海浩

太宰治の社会復帰への一考察—「富嶽百景」を中心に

(8) 李雪

江馬修と現代中国—「小さい一人」を中心に

9) プログラム紹介③

「第1回タリン大学・筑波大学合同フォーラム」(2011年12月実施)では、研究者以外に、学生の発表が6件行われた。

(1) 隋源遠

御子左家の歌学と年内立春詠

(2) 荒井未有

日本語母語話者の自然談話における対称詞使用に関する研究

(3) タティアーナ・フィッシェル

日本のユダヤ人：日本にはユダヤ人差別があるのか。

(4) ピレ・シードラ

エストニアと日本の民話における想像上の動物の比較

(5) スサンナ・ヌッケ

アイヌ宗教のカムイと神道の神の比較

(6) アロ・ユエカルダ

戦後の日本映画にみられる「過剰イメージ」



タリン大学での「第1回タリン大学・筑波大学合同フォーラム」において研究発表を聴く聴衆

10) プログラム紹介③ 現在計画中的フォーラム

今年度中に、3つのイベントを企画しており、SS学生とSV学生の交流の場を設けている。

「第1回 東アジアとユーラシアを結んだ国際日本研究フォーラム」(2012年1月21日実施予定) 発表者数40件。

「第3回高麗大学・筑波大学合同フォーラム」(2012年2月実施予定)。

「第9回文明のクロスロード—ことば・文化・社会の様相—日本学学際シンポジウム」(2012年3月実施予定)。

11) 課題

ここ数年、人文社会科学研究科内で行ってきたプログラムを統合・発展させる方向で本年は運営してきた。学生への研究指導だけではなく、プログラム参加学生にもフ

フォーラム運営のノウハウが実感でき、全体的にはスムーズな流れとなった。各フォーラムには特徴があり、大学院レベルの日本研究でもレベル、目的、アプローチには異なりがあることが明確になり、違いを活かしながら、質の向上を含め、発展させていくことが、関係者一同の共通認識である。共同して学生指導を行って行ければ、日本研究の深まりとなっていくであろう。

SS学生の受入れ時期を10月期と12月期に分け、各3カ月プログラムを用意したが、受入れ人数の確定から、学生募集までの時間が短く、大学によっては7月8月は業務が停止している機関もあり、参加者の確定がプログラム開始直前にまでかかった協定大学もある。また、予想より日本語力に異なりがあり、講義・演習での共通言語には課題が残った。1月21日にSS学生とSV学生の協働学習によるフォーラムを企画しているが、修了論文提出を間近にした学生には負担を強いたこともあり、適当な受入れ時期については改善の必要性を感じている。

最後に、各フォーラムでは学生実行委員会が組織され、参加者への連絡、プログラム作製・広報、当日の運営など、いずれも大変細かな作業を担当してくれた。名前を全て挙げられないが、感謝の意を表したい。